
IS 一夏の叛抗 ~

終那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 一夏の叛抗

【Zコード】

Z8629Y

【作者名】

終那

【あらすじ】

一夏改変モノ。色々、突っ込んでいくうちにえらい事になってしまつたもの。これぞ、自重?ナニソレ、オイシイノ?です。

注意!

改変なんて邪道だ!や、 なんぞ、 知るかボケエ!の方は、 プロトタイプネクストにガチタンで討伐しに逝つて下さい。

プロローグ（前書き）

初見となる私は、終那です。やつてしまつたが、後悔はない。極力、失踪しないように頑張ります。
プロローグです。短いです。駄文です。こんなで、よろしければ、読んでいって下さい。

プロローグ

これは、とある平行世界の物語。イレギュラーとなってしまった主人公は一体、どのような答えを導き出すのだろうか。それは、一体、どれほどの範囲に及ぶのか、どれだけのモノを犠牲にしていくのか。見当が付かない。

しかし、人である以上、何かの代償無しに何かを得ることはできない。それが世界共通の理ならば、主人公は何を対価に何を得るのだろうか。

電腦虚数空間の奥底で、数多の因果律を管理する自我は、ただただ、見続ける。様々なイレギュラー要素の入り混じった、平行世界の行く末を。

GET READY?

プロローグ（後書き）

後書きと名ばかりの、懺悔部屋。

いつも、英語の使わなくなつたノートに書いていた短編小説なのに、長編になつたという罫。なんか、急にガクブルが、と・ま・ら・な・い。

ああ、目の前に月輪が見えるのは、気のせいか。神は言つている。ガチタンで戦え、と。

ガチタンでやつたら、うロ主の技量じゃ瞬殺ですな。ノーマルで、ギリッギリでしたから。

と言う訳で、これから月輪を相手にガチタンのハードで、キヤツキヤウフフしてきます。それでは、ここで失礼させていただきます。

人物設定集1（前書き）

前のやつの修正版。 12月3日修正。

本小説の、設定です。

・織斑一夏

この小説の主人公にして、最大の改変処置をした人物。作者自身、どうしてこうなった、と思う今日この頃。

誘拐事件の折、ハッター軍曹（後述）に助けられ遅れて救出に来た千冬と決別する。それに伴い、「織斑」から「霞」に苗字を変える。（番外編で書きます。）その後、ハッター軍曹の下でMARZに入るための訓練に明け暮れる。このときに、コルタナ（後述）と出会い、以降はパートナーとして共に任務や学園生活を送る。MARZには、12歳で入隊。最年少ながら、14歳で少尉に昇格。昇格と同時に対シャドウ部隊「白虹騎士団」設立、初代騎士団長に就任。性格は、原作にあつた甘さを抜かし、物事を客観的に見るような性格。千冬と束に対し、激しい嫌悪感を抱く以外は、大して変更無し。唐変木も健在。

専用機「テムジン707」「テムジン747」Type a8

・コルタナ

高性能AIで、一夏のパートナー。基本、Vクリスタルもしくは一夏のISが、彼女の居場所。勿論、ハッキングもできる。主な仕事は一夏のサポート。

コルタナはMARZが開発した、施設管理用AIのプロトタイプ。それが、最年少でMARZに入る一夏に、ハッター軍曹がテスター兼訓練課程終了記念に、プレゼントしたもの。一夏の下で、全てのテストやら実験が終了した後でも一夏といるのは、単に彼女が言い出したため。

彼女から得られたデータを基に、施設管理用高性能AI「VRシリーズ」がMARZ支部で活動中。（出展・HALOシリーズ）

・織斑千冬

一夏に決別され、ドイツで教官を一年間やり、IIS学園で教職とう名の監視されている人。

自分のやつてしまつたことを、今更になつて絶賛後悔中。しかし、どうすることもできずただ、教務に忙殺される日々。ある意味、作者の断罪対象者その1である。そんなに改変無し。

・ハッター軍曹

熱い人、兎に角熱い人。某テニスの熱い人を想像してくれればOK。一夏誘拐事件で、一番速く一夏を救出し、その後一夏に特別訓練させた人。若干一夏が熱いのは、紛れもなくこいつせい。

MARZ東方支部の総司令官で、階級は准将なのだが、何故か、部下や一夏は軍曹と呼んでいる。というのも、軍曹のときにやらかしたため。部下や一夏にかなり慕われている。

実は、一夏と千冬の両親と面識があり、有事の際は子供達を頼むと言っていた。しかし、一夏と千冬が決別し離れ離れになつたことで、彼は非常に頭を悩ませている。一応、一夏の後見人として書類に記述されている。

IISが発表される以前のパワードスース「アファームド・ザ・ハッター」が、愛機。（出展・電腦戦記バーチャロングマーズ）

・ベルリオーズ

作者の中で、織斑父役をどうするか一番迷つた人物。因みに、迷つたのはジョシュア・オブライエン。かつこいいよね、ジョシュア。織斑姉弟に両親がいなのは、両方ともKIA（戦死）のため。

記録では、MARZに所属しており、任務中に戦死となつてている。（出展・ARMORED CORE 4）

・霞スミカ

作者の中で、千冬と口調が似ていると思われたため、織斑母役として登場。

・ベルリオーズと同じく、KIA（戦死）となつてている。

記録では、MARZ所属で新型パワードスースのテスト中に、スースが暴走しその鎮圧時に戦死。詳細は不明。（出展・ARMOR

ED CORE 4)

・クリアリア・バイアステン

マーズでお世話になつた人も多いはず。別名、白騎士。

「白虹騎士団」の副団長で、一夏が学園に通つて いる3年間や任務

でいなきのピンチヒッター。優秀だが、一夏信望者。

一夏からは、引かれているのに気づいてない。ある種の、鈍感。

)

出展・電腦戦記バー・チャロンマーズ)

組織及びテクノロジー設定集（前書き）

前のやつの修正版。 12月3日修正。

組織及びテクノロジー設定集

この設定を軸に、本小説は成り立っていますのでよく注意して、お読みください。

テクノロジー編

・クリスタル

地球のとある遺跡にて発見された、クリスタル。8面結晶体で、遺跡にあるのは全長5メートルもある。一夏が所有しているクリスターは、MARZが解析し独自に切り出したもの。ペンドントタイプ、として身に着けている。

クリスタルの作用で現在分かっているのは、精神干渉作用、空間転移作用、電子干渉作用の三つ。しかし、眞の能力は「事象の転送」である。

・定位リバース・コンバート

早い話が、ワープ。ただし、人間サイズが限度。

・シャドウ

クリスタルの精神干渉作用により、人々の無意識が具現化し凶悪化したもの。ISによる女尊男卑の風潮が世界に広まつてからは、出現数が軒並み増加。

組織編

・MARZ

特務機動部隊MARZが、正式名称。

設立目的は、対テロ、対紛争の即時鎮圧が目的で、今となつては専ら、警察機関の代わりとして機能している。まあ、設立当初からやつてることは、何にも変わつてない。

一夏が白虹騎士団を設立する前に、シャドウ討伐を行つていたのもMARZ。

東方支部総司令官・イッキー・ハッター准将

東方支部所属・霞一夏少尉

・白虹騎士団

一夏が設立した、対シャドウ用の部隊。選りすぐりの人材に、装備、設備、そして資金。極めて特殊かつ異常なほどの、戦闘集団。最新のパワードスーツを更に、個別にチューンした、「テムジンシリーズ」が正式採用されている。

騎士団長・霞一夏

副団長・クリアリア・バイアステン

(組織及びテクノロジーの出展・電腦戦記バー・チャロンマーズ)

第一話 世界に一人。（前書き）

やつと、一話う。さて、これから忙しくなるぞ――！

第一話 世界に一人…

「失礼します。霞一夏少尉、出頭しました。」
ビシッと正面を向いて敬礼。制服に似合わず、その顔立ちは少し幼い。

「よく来たな。だがつ…！ 楽にしていい、ぞ…！ これは少々プライベートな問題だ。」

「了解。言つておくけど、娘が最近云々は、聞かないからな。」
「ガツテーーム…！」

イッキー・ハッター准将。俺より階級が高く、東方支部の総司令官。なのにもかかわらず、なぜこうも出世できたのか、甚だ疑問だ。
「しかーし…！ これは、一夏の問題についてなので置いておく。」

「俺の？」

心当たりが、多すぎる。ドイツ軍のあのチビとのございぢやな、どうにかして解決したし。白虹騎士団設立時の揉め事は、ハッター軍曹の口添えで解決したし。…、他に何かあつたか？

「あるでしょ？ 非常事態だつたとはいえ、開発中のISを起動させたのよ。忘れたの？」

「ああ、あれか。でもあれって、当局がどうにかするんじやないの？」

「どうにかするから、私達がここに呼ばれたんでしょう。ですよね？」

全く、よくできたA.I.だ。彼女は、コルタナ。高性能A.I.、俺のパートナー、以上。

「当局は、世界で唯一のIS男子適格者として、世間に公表するつもりらしい。勿論、データも公表予定だ。」

「…、それって下手すれば、世界が変わる。」

「ああ。だから、一夏。上官命令として、霞一夏少尉にIS学園に出向し、ISについての基本事項を十分に訓練することを命じる。」

「は？」

つい、間抜けな声を出しちゃった。ちょっと待て。俺がITS学園に行くのはわかった、が、その間の俺がやつてる仕事はどうそんの！？まさか、当局が人材を派遣するとか？いやいや、あそこがやるわきやないだろ？いつも、何もしないくせに。

「一夏、言葉に出てるわ。」

「どうから？」

「ちょっと、のどこりから。」

「まあそれについてだが、当局に補充要員を要請した。これで、来なければそれまで。来たら、万々歳つてどこりか。」

「……、了解しました。駄目もとで、専用機は？せめてそれくらいあるでしょ？？」

「あると信じたい。」

「あるぞ。MARZの開発した第四世代ISが。テムジンフロフ」

が。この機体が、一夏の専用機として運用される。」

「まさかの、テムジン系か。」

扱いやすいんだろうな。武装もシンプルだから、俺は好きだ。なるほど、大体分かつてきた。

「ゴルタナ、ISに関する情報収集、頼む。」

「もう言つと思つて、既に収集済み。後で、用を通しておこて。」

「ということは、俺達はここで失礼させて頂きます。」

ドア付近まで戻つて、敬礼し部屋を出た。廊下を歩きつつ、これから為すべきことについて考えるのだった。

第一話 世界に一人。（後書き）

懺悔部屋

前の設定集でミス発見。しかし、どうやつても、本文の修正ができるない。どうすりやいいの！？あれか、ブレオンでかーちゃん擊破か！？余計なもの、一切無しで！…普通に死ぬな、こりや。

とりあえず、ごめんなさい。いつか、普通に後書きになる日が来るのだろうか。

というわけで、ここからで失礼させていただきます。

第2話 部屋に 一人（前書き）

お前、テスト期間中に何やつてんのとか、つっこみはいらぬいぜー！

廊下を歩きつつ、思つこと。要は、仕事のことなんだが。

「どうしたもんかねえ。」

「クリアリアに、任せればいいんじゃないかしら。」

「うえ。あいつにか？」

「そうよ。優秀でしょ、彼。」

「確かにな。…、内面は兎も角。」

「ええ、…、そうね。」

クリアリア・バイアステンは、あらゆる面で相当に優秀な、俺の部下だ。ただし、内面は、霞一夏信望者でちよいと、残念である。

「つー訳で、クリアリア・バイアステン中尉を白虹騎士団騎士団長代理を命ずる。頑張れや。」

「は？ 話が見えないのですが？」

「言つてなかつたけか？」

「言つてないわよ、一夏。」

「あちやー、やらかした。ついでに書類整理もあるから、俺の執務室に来いよ。どうせ、手伝つてもらおうとしてたし。」

「了解しました。」

ちょうどいい所にクリアリアがいたので、俺の騎士団長用の執務室に、一緒に行くことにした。因みに、何故、階級がごたまぜかといふと、白虹騎士団には実力がトップクラスの人間が集められている。そうして集めていくうちに、今のような階級が下の者が上の者に、命令するという奇妙な構図ができたのだ。やつたのは、俺だけね。そういうしている内に、執務室到着。うん、書類で雪崩が起きそうだ。

「えーとな。俺がEISを動かせるのはこの支部の共通認識だ。当局はそれを世界に公表するらしい。で、公表するからにはEIS学園に行けとのお達しだ。俺が言つてるのは、クリアリアに帰し団長業

務の代行をしてもらいたい、ということだ。」

「そういうことですか。なるほど、クリアリア・バイアステン中尉、了解しました。」

「まあ、俺がいない間でいいから。休みのときは、戻ってくるし。」

「フフ、学校生活、頑張つてください。騎士団長。」

「それを言うなや、副騎士団長。手伝えよ、ホレ。」

書類の山、一角を押し付ける。単純な嫌がらせでだ。少しはこれで大人しくなるだろう。俺も、書類の山に挑むとするか。果てしないが。

数時間後、何とか二人での山々を片付けて私室にて、コルタナが調べた情報を見ていた。

何、この専門用語のオンパレード。或いは激戦区。残りの期間で、覚えきれるか？…、いや、覚えなければなるまい。心が折れそうだ。

「思つたんだが。」

「何？」

「こ、イグニッショングースト、というもの。EN効率、悪くないか？」

「放出と圧縮の繰り返し、みたいなものだものね。」

「ENのロスが多すぎる。それなら、圧縮から放出した方が、効率良いだろ？。わざわざ手間を掛ける必要もない。」

「そもそも、ISのEN 자체、容量が少ないものね。」

「EN管理したいなら、こんなことするな、という宣告なのだろうか。」

ふうむ、分からん。あの人の意図が。別に、分かりたくないが。天才と凡人では、差がありすぎる、ということか。

「全く、誰がこんなに複雑に作ったのか。」

「一夏、……。」

「贖罪に痛みが伴うならば、それは甘んじて受け容れなければならぬ。それが例え、どんなことだつたにしても。」

世界を変えた代償、それは一部の人間にとつて多大なる喪失と同意

義であった。誰も見向きもしなかつた罪に初めて人が眼を向けるとき、人は隠されていった真実を知る。

第2話 部屋に 一人（後書き）

懺悔部屋

今日は、特に無し。これから、クリアリアがどんどん変な方向に行く予定。こちらで失礼させて頂きます。

第3話 学園に一人（前書き）

誤字修正 12月11日

第3話 学園に一人

いつの間にか時は流れ流れて、入学式。思えば色々あつた。今でこそMARZのマークのバッジとして、待機状態になつている「チームジンフ07J」の、データ収集が面倒だつた。というか、あれは普通に死ぬ。コルタナがいなかつたら、どうなつていたことか。アファームド・ザ・ハッターと一緒に打ちとか、マジ勘弁して下さい。死ぬから、ガチで。

つと、終わつたらしいのでそそくせと、教室に移動。俺は見世物か。あちらこちらから、視線がキツイ。うつわー、こりや、精神がガリガリ削られていく。こんなんでやつていけんのか、俺?なんつーか、ノイローゼになるんじやないか、これ。

「(フフ、大変になりそうね。)」

「(そう思うなら、助けてくれ。実体化できるだろ?が。)」

「(私つて、一応重要機密なのよ?)」

「(へえー、そりや初耳だ。でも、機密なのはVクリスタル内の基盤の方だろう?んじや、問題なし。)」

「(物はいいよね。ばれても、知らないから。)」

Vクリスタルによる精神干渉の、ちょっととした応用での会話。慣れれば、俺やコルタナの見た映像をやり取りできたりする。ただし、かなり疲れる。

そんなこんなで、教室に到着し席に座る。ど真ん中つてないよな。いくら出席番号順でも、男女の区別くらいつけて頂きたい。こんなところで、男女平等やられても正直困るのだが。本当、どつにかしてるぜ、この世界は。

「織斑くん!織斑一夏くん!」

「ええ?あ、はい。何でしようか?」

「い、ごめんね。お、怒つてないよね?い、今自己紹介で「あ」から始まつて今「お」で織斑くん

の番なんです。じ、自己紹介してもらえるかな？」

「了解しました。それが、命令であるならば。」

「いいですか？絶対ですよ？約束ですよ？」

そしてこの低姿勢である。この人、教師か？…その、えと、体格的に。

「了解しました。それと、そう易々と約束するものではないですよ。特に、できない約束はね。」

「え？」

椅子から立ち上がり、周囲を見渡す。一度、深呼吸をし気分を落ち着かせる。何事も最初が肝心、だからな。

「俺は、MARZ東方支部所属、白虹騎士団団長、霞一夏少尉だ。好きなものは、大してない。嫌いなものは、逃げることしかしない者、向き合うことをしない者、無責任な者、だ。それと先に言っておく。次に俺を「織斑」なんて言つた奴は、スプライナーの餃にしてくれる。」

その後席に座ろうとしたが、強烈なプレッシャーを感じ、横にずれる。誰だと思い顔を向けると、俺の一番嫌いな人物の一人がいた。

「織斑、殺氣を仕舞え。」

「失礼ですが、入学書類には確かに「霞一夏」と書いていたはずですが？」

「しかし、お前は…」

「霞です。どこの誰がやつたのか知りませんが、俺は霞です。でお忘れなきよう。」

それからようやく席に座り、クラスの女子がぎやいぎやい騒いでる中、授業の予習をしていた。こうでもしないと、授業に着いていけないからな。時間があるうちにやつてしまはないと。

一時間目の授業は、まあ順調だった。少し校則違反だが、「ジン・ジン」のディスプレイを左目に展開させ、分からぬ単語やシステムをコルタナを介して解説を引っ張り出していた。見る人が見れば、一発でばれるが、下を向きノートや教科書を盾代わりとしてい

たため、事なきを得た。これは、いい抜け道だ。

そして、休み時間。

「おい。」

「んあ？ 何か用か？」

「ちょっとといいか？」

「ああ。」

「廊下でいいか？」

「行こう。」

幼馴染に連れられて、廊下に。つか、不特定多数の女子、話したいならそつちから来いよ。俺にはただ、ドン引きしてる様にしか見えないんだが。

閑話休題。

「・・・・・。」

「用がないなら、俺は戻るが？」

「何故？」

「その問いは、回答が多すぎて俺には理解できないが。」

「この六年間、何があつたんだ？ 何故、一夏は変わった！？」

「俺が変わらないと、本気で思つてたのか？ そいつは感動的だが、無意味だな。人は誰しも変わる。変わらないものなど、どこにもないさ。算。」

俺は呆然としている算を尻田に、一足先に教室に戻り授業の準備を進めた。この時も、ディスプレイを展開していた。

「（良かつたの？ アレで？）」

「（良くはないだろうが、態々言つ必要もないだろう。）」

「（でも、一番の被害者よ。彼女。）」

「（一番場はないさ。）サイルが落ちてそれに巻き込まれた奴らが、時系列的にも精神的にも、一番の被害者ぞ。それ以外は、一番以下だ。）」

「（まあ、確かにね。）」

「（なまじ優秀な姉を持つちまつと、下もそうだと、人々は勝手に

思い込み拳句、押し付けようとするからな。)「

俺が、そうであつたように。いいよな、天才は。何にも努力しなくて、何でも出来て。俺にはとても、そんな芸当できない。少年は、憎悪する。この世界を変えたある人物たちを。しかし、その事実にまだ誰も気づいてはいなかつた。

IS及び追加設定集（前書き）

誤字修正 12月11日

IS及び追加設定集

- ・IS「テムジンフ07」「霞一夏の専用機。中近距離戦の高速戦闘に特化した機体。全身装甲で、MARZの技術を結集させた第4世代ISの完成版。武装は、ビームソードとビームライフルが一体となつた、スプライナーとパワー・ボムのみ。これだけの装備でも、十分戦えるのは、偏に一夏の実力あつてこそそのもの。

单一能力「因果制御」

因果制御は、Vクリスタルの本来の能力である「事象の転移」を利用了した能力。どんな絶望的状況下でも、発動すれば戦局が一気にひっくり返ることが可能。ただし、零落白夜以上の燃費の悪さに加え、一夏自身、最後の手段として普段は自重している。

装甲に、Vアーマーを用いているので、ビーム系に対し圧倒的なアドバンテージを有している。

・Vアーマー

某ガンダムのPS装甲のビームVER・もしくは、AC4系のPAのレーザーVER・欠点として、物理攻撃を受けるとVアーマーが消える。これは、パワードスーツも同様で、MARZ製のものには標準装備。

・Vコンバーター

人工的なVクリスタルの、劣化模造品。これとVディスクがあつて始めて、パワードスーツやISが実体化できる。早い話、ゲームのハードウェア。

・Vディスク

Vクリスタルを細かく粉碎し、巨大ディスクに均一に塗つたもの。このディスクに書き込まれたデータをVコンバーターで再現することにより、実体化できるようになる。要は、ゲームソフトと一緒に感覚。

・ Vポジティブ

Vクリスタルによる電子干渉作用と精神干渉作用にどこまで耐えられるかを、ランクにしたもの。E - D - C - B - B + - A - A + , A A - S - S + - S S とランク分けされ、+ とは A ではないが A A では少し違うというようなもの。E - C が粗製で、どうにかこうにかパワードースーツ「ライデン」、「VOX」「バル」系が動かせる程度の適性。B - A + が最適な適性で MARZ が一番に欲してた人材。パワードースーツ「アファームド」「マイザーデルタ」「テムジン」系が苦もなく動かせる程度の適性。A A - S S は最早人外の適性者で、パワードースーツ「テムジンフ47系」「スペシネフ」「フェイ・イエン」「エンジュラン」といった強力かつ癖の強いパワードースーツを平気で乗りこなす。

ただし、適性が高いとそれだけシャドウになりやすい。

霞一夏、ランク S S

イッシュ・ハッター ランク A A

クリアリア・バイアステン ランク S +

なお、白虹騎士団団員の平均ランクは S である。

・フレッシュ・リフォー

MARZ のシャドウ研究所が、シャドウ汚染患者兼 MARZ 所属のパイロット ようの医療プラントとしての施設。ある程度ならば、シャドウ汚染患者の治療ができ、高い水準の医療環境を提供しているプラント。民間の患者も受け容れれていることから、世俗的認知度は高い。MARZ の資金の一部はここから出ているといつても過言ではないくらいの、人気の高さ。実は、イケメン担当の奥様方が多いとか。所長は、リリン・プラジナー。

・リリン・プラジナー

わずか 12 歳で、研究所所長に登り詰めた天才少女。一夏の親友で、一夏を実験台に新薬のテストをしているとかしてないとか。腕はいいが、世間知らずで、一夏の頭痛の種。

HS及び追加設定集（後書き）

後書き

ベ「それについても、誤字脱字が多すぎやしないか？」

霞「全くだな。どうにかならんのか？」

出来たら苦労はしません。大体、書くスペースが狭すぎでしょ。おかげで、変な風に変換しやがるし。

ベ「…。」

霞「…、文句を言ひな。閲覧モードでよく確認すれば良いだけの話だらう。」

…、全く持つてその通りでござります。

霞「ちょっと、うつ主借りるぞ。ベルリオーズは、予告でもしてくれ。」

え？ ちょっと…ま、ええーー！

ベ「…、やるか。次回、一夏の冗談にしてはたちが悪すぎる冗談に食らいつく、イギリス代表候補生の話だ。まあ、高々代表候補生、一夏の敵ではないだらう。第4話 断頭台への行進・起 お楽しみに。」

第4話 断頭台への行進・起（前書き）

いつの間にか、この小説のアクセス数が100000件超えていた件について。

な、何すればいいんだろうか。本気で悩む今日この頃。

第4話 断頭台への行進・起

それで何事もなく授業は進み、俺は退屈していた。そもそも、MARZに入るに辺り、それ相応の学力が求められる。それ故、俺は訓練と平行して、一応大学レベルまでの学力はある。従つて、高校でやるような勉強は俺にとって簡単なのだ。だが、ISの授業は面白い。山田先生という合法口りがいるから結構、楽しんでいるけどな。

「（恐るべし、合法口り。）」

「（いつからロリコンになつたのかしら？一夏？）」

「（いや、俺はロリコンじやない。断じて。ただ、眼福だ、と思つただけ。）」

「（男の子だものね。）」

「（…、写真を売り捌いたら、儲かるだらうか…）」

「（やめなさい。本人の名誉のために。）」

まあ、MARZってかなり給料が良いから、金に困つてないんだが。しかし、俺が男だといい加減認識してもらいたいものである。いくらか、女性にしか分からぬ単語出でてきたぞ。

そして、いつもの如く休み時間。

「ちょっと、よろしくて？」

「…、イギリス代表候補生セシリア・オルコットか。何の用だ？生憎、手が離せん。手短に頼む。」

うわつ、女性至上主義者が来た。このプライドの塊みたいなものと一緒にいたくなー。

「な、何を…！まあ、私のことを知つていらつしゃたようなので、見逃して差し上げますわ。入試のとき教官を倒したエリートですが、泣いて頼むなら、教えてあげてもよくつてよ？」

「よし、コルタナ。この、馬鹿白慢女が倒したらしい教師のデータ、見せてくれ。どうせ、たいしたことはないとは思うが。」

「待つて…。出たわ。IS学園では、実力は中の下ね。入試時の

「ISは打鉄。遠くから弾幕を張れば、勝てない相手じゃない。」

「だ、そうだ。俺に自慢したいなら、世界最強に一騎打ちで勝つか、一ヶ月で大検とるなりしてみる。それと、俺にはコルタナというアンタより優秀なAIがいるから、別にいいわ。」

「な、なんですか!? それは!!」

「何、だつていいだろ!? つか、時間だぜ?」

「時間ですつて!? 何W「さつさと席に着かんか、馬鹿者。」ツツツ!!」

バコンツ!!

今、出席簿らしからぬ音がしたし、頭蓋骨から変な音が聞こえたんだが。体罰つて、今時期ご法度じやないのか? 知つてんのかな、いや、知れねーなこれは。

「ツツツ!! いい!? 逃げないことよー!! よくつて!??」

「逃げられない上に、よくもねーよこの馬鹿自慢女。」

セシリ亞・オルコットは席に戻り、われらが暴君、織斑千冬によるパーフェクトIS授業が始まつた。ISの各種武装の説明だが、ぶつちやけ、俺には関係なかつたり。

理由は簡単。俺のISには、追加装備が開発されてないのだ。ついでに言うと、单一能力を発現させる為に、アンロックはおろかウイングスラスターも無い。勿論、バスロットの大半をそれに回しているので、余計に容量が無くなつた。まあ、乗りこなせるのが俺だけだつた、つていうのも拍車を掛ける要因なのだが。それでも、パワードスースにボコ半にされた俺だけども。

「そういうえば、クラス代表を決めなければな。」

面倒臭そうだな。やりたく、ねえな。ここでも、要職とか勘弁してほしい。というわけで、冗談でも言つて回避しよう。面倒は嫌いだからな。

「先生。」

「どうした霞?」

「俺、クラス代表なんか、やりたくありません。」

お前は食ひこつくなー話がややこしくなぬでしょ？がつ！黙れ、S
ヒーツ ハーツ！

「今、何とおっしゃいました？クラス代表なんか？貴方、世界で唯一の男性適合者だからといって、調子に乗らないでいただけるかしら？」

「（コルタナ。）」「（オク、分かつてゐる。）」

「我愛誰」，「誰愛我」，「我愛誰」，「誰愛我」，

「私は、こんな文化的に後進した島国にサークルに来たのではございません。それに、意味も分からぬような極東の猿と一緒にしてもううては困ります。」

「成程。随分、偉そうだな。ふ、うらやましいよ。」

完全に、ブチ切れています。クラスの皆、すまん。殺気が抑えられそうにもない。

「身の程知らずも、いい加減にしろよ？小娘。誰に向かつて、そんな口を利いているのか、その足りない頃で考えにいがうござ？今の、

貴様の発言は、IS開発国である日本を俺の所属する特別ARZを、そしてイギリスの品位をすら、貶めたんだ。」「

同意義になるのよ。」

見る見るうちに、顔が青くなつていく馬鹿一人。自分の失言によく気づいたか。でも、もう遅い。思つたんだが、代表候補生つて一体どんな基準で選ばれるんだ？ 強さか？ それとも、IISとの適合率か？ どちらにしろ、死に腐れ。

「どうする？ちゃんと、ボイスレコーダーに撮つてあるんだが？」
バダンッ！

「ちよつ、衛生兵ー！衛生兵ー！」

第4話 断頭台への行進・起（後書き）

後書き

ベ「大丈夫か？」

（返事が無い。ただの屍のようだ。）

霞「さつさと起きる。また、やらせるぞ？」

「……いやー、起きましたよ！？起きました！？」

ベ「何をやらせたんだ？」

霞「たいしたことじやない。プロトタイプネクストを2体同時に、相手にさせただけだ。ブレオンで。」

ベ「（我が家ながら、恐ろしいことをする。）」

霞「勿論、月光だがな。」

ベ「頑張ったな。うむ。」

し、死ぬかと思つたよ。まじで。しかも、片方はジョシュアとかマジキチ。

ベ「それはおいといて、予告だ。」

かすみ「ああ。次回、一夏に、とある情報が耳に入る。激昂する一

夏、その情報とは？次回第5話 断頭台への行進・承 お楽しみに。」

第5話 断頭台への行進・承（前書き）

誤字修正 12月17日

第5話 断頭台への行進・承

「…、まあ、よくもまあ抜けぬけどあんなことを言えたものだ。正直、あのが代表候補の言つことか?」

「……。」

「 もう少し、まともな感性を持ったものがいなかつたのか?同情に値するよ。さて、先生、授業に戻りましょう。こんなことに時間をとつている場合ではないでしょ?」

この数時間で分かつたこと。兎に角、人間としてのレベルが低い立つてている足場が高すぎて、自分の足元が見えてない。代表候補生、こんなことだと、高が知れるな。普通、自分の発言の影響力なんて気にしないし、する必要もない。だが、代表候補生となると、話は別だ。このようなクラスのなかでさえ、代表候補生ともなると自分の発言が、そのまま自国の発言に取られることもあると、何故理解しない。まあ、それで困るのは俺じゃないから良いけどな。しかし、良かつたんじやないのか?代表候補、その影響を身を以つて教えたんだからな。

「(先が思いやられるな。)」

「(この調子じやねえ。)」

「(今頃支部内は、戦闘態勢でも取つてんじやねえの?)」

「(一夏が、私に情報を流させたからでしょ。それにしても、その確信犯的愉快犯な性格、どうにかならない?)」

「(…、善処はするわ。)」

そして、授業は滞りなく進み、俺は、必死にノートを取つていた。視界の隅に、何やら山田先生までノートを取つていたのを見たが。何が、取る程のものか?これ?だつて、教科書に載つてることだけをただ、つらつらと言つてるだけだぜ?取る必要、全く以つてないと思うんだけどな。もつちょい、教科書に書いてないこととか、ここだけの話とか、色々あるでしょうに。…、俺としては、織斑先

生にそんな器用なことやつてのけるなんて、思ひちゃいないがな。
むしろ、ここまでの恐慌政治とスパルタ教育に脱落者が出なかつた
ことに、俺は引いてるよ。

そして、**昼休み**。

やつほーーい！！飯だ！飯だ！IS学園つて、食堂にも金掛けてあ
るらしいから、うまいらしいんだよな。これは、期待大、だな。
早速、食堂へGO…？

バタンツ！

「ハアハア、貴方よくも・・・。決闘ですわー！その、減らず口、
叩きのめして差し上げますわー！」

馬鹿白慢女が、何やら厄介」とを、持つてきやがつた。しかも、決
闘だと？ふざけた真似を…！

「言つておくがな、俺は面倒が嫌いなんだ。そんなにやりたいの
なら、よそでやれ。」

「あら？負けるのが、そんなに怖いのですの？」

「こいつ、言わせておけば…！！！決めた。ここは、ぶちのめす。
完膚なきまでに、叩きのめす。」

「良いだろう。吠え面かくなよ？」

「決まつたな。1週間後、第3アリーナで霞対オルコットの模擬戦
を行う。両名とも、準備を怠らないように。」

「はい。負けたら、私の小間使い、いえ、奴隸になつてもらいます
から。」

「了解。世界人権宣言も知らないのか？ツフ、やまあ無いな。」

片や、顔を真つ赤にして怒る少女。片や、涼しい顔で挑発し続ける
少年。

勝敗は、もう、決まつてたりする。南無。

それから、食堂で昼飯食つて、授業。そして面白くもなんとも無い
ので、容赦なくカツト。つーわけで、放課後。

「ふいー、……、やり過ぎたか？」

「やり過ぎよ、十分に。」

「反省はしている。やり過ぎた。しかし、こんな所で働いているとは。」

「事実上の、監視ね。それに、自分の弟まで人質に取られているようなものだもの。」

「俺は、あいつとは何の係わり合いも無い。赤の他人だ。」

俺は、ノートや教科書を片付けながら、コルタナと話していた。主に、オルコットとの「ざ」について。自分でも、やり過ぎた、という自覚はある。どうも、俺はプライドの高い奴と、馬が合わないらしい。頭に来るんだよな、プライドの高い奴相手にしてると。

「あ、織（ギロッ）」ひい、か、霞君！まだいたんですね。良かつたー。」

「何か用でも？」

「はい。部屋割りのことですが……。」

「1週間ほど、支部から通えと聞きましたが。」

「それが、急遽変更になつて、寮に入ることになりました。」

「勿論、一人部屋ですよね？」

「いや、あの、そのお……」

OK、分かつた。女子と相部屋か……。

「非常識にも程があるだろうがーーー！恋人でも、ましてや夫婦でもないのに一緒に部屋つて、どういうア見してんだーーー！一番やつたら、駄目だろがーーー！！！」

怒髪天を突く、まさにこのことかしら。当然よね。IIS学園の寮制が相部屋方式を採用しているのは知っていたけど、男性にも適用して、一体何させたいわけ？まあ、一夏のことだから定位リバース・コンバートで支部から通うのでしょうかけど。

アンケート（前書き）

ファイルは持ってきたのになしてこうなるかなあ？

アンケート

霞「今日は本編でもなく、また番外編でもない。で、うつ主をつとめしろ。」

はい。えー、このたびE.S.一夏の叛抗「ご覧の皆様、うつ主」と終那がプロットを書いたノートを学校に置き忘れるという失態を犯しました。なので、月曜日まで本編はあるか、番外編までも投稿することが出来ません。楽しみにしてくだつた人、暇つぶし程度に見ていてくだつた人、本当に申し訳ありません。

霞「ああ。本当に。貴様、分かつているのだろうな？」

し、仕方ないじゃん！学校しかプロット書く時間無いんだからさ。

霞「…、言い残すことは、それだけか？」

へ？

霞「さて、シユミコレーターに逝くぞ。加減はしてやる。相手は、レイヴンだ。ただし、ラストレイヴンに登場した全レイヴンだがな。」

「
どこが、加減したんだ————丸つきり、死亡フラグでねえ
かああ————！」

霞「易しいだろう？ベルリオーズ、後は頼む。」

ガシツ、ズルズル

ベ「…、行つてしまつたか。それよりも、これを読めば良いのか。」
ベ「本編での最初の脱落者、篠之乃籌にパワードースツ何乗せるか、
だそうだ。MARZに入れることは、確定らしい。

- 1、テムジン系列（例；ファイアフライ）
- 2、フェイ・イエン（例；ヴィヴィット・ハート）
- 3、エンジュラン（例；アイスドール）

項目は増えても良いし、兎に角バーチャロンの機体なら何でも良い。なかなかうつ主じや決められないから、皆様の意見を参考にしたい。そうだ。まあ、こんなところか。意見・感想・うつ主への叱咤激励

等々、隨時受付中だ。それでは、この辺りで失礼する。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8629y/>

IS 一夏の叛抗～

2011年12月17日21時52分発行